

大学

アーカイブズ

関東地区大学史連絡協議会会報

1992. 3. 18 No.6

Association of College and University  
Archives of Kanto Region

1991年11月28日(木)研究部会（講演会）

## 大学史編纂と人物史

梅花学園資料室 遠藤トモ

### 人物史の意味

何故人物史を取り上げたかといえば、どの歴史も同じように「大学史の主役は人間」ということだ。大学を形成しているのも人、人は思考能力が備わっているのでその人の哲学、思想、世界観などが反映し、その上にあらゆる知識に基づく精神が多岐に亘り存在し、その精神を基礎として私立大学が設立されたのである。即ち、私学では「建学の精神」をもっているということが大きな教育の主柱となり、個性ある教育を受けた人達を社会に送り出すことができた。

したがって、年史も建学の精神をどのように歩んだかが欠かせない部分となる。資料室が取り扱う資料の内容も思想が中心となり、この評価の上にたって資料室の運営、資料管理がなされなければならないと考えている。それでは資料室に勤める者として、人物史をどう取り扱えばよいのか。既に多くの大学資料室が紀要や資料集、個人の研究誌、年譜、文献目録などを出版するようになった。最近では『関西大学百年史』全3巻のうち1巻は「人物編」である。1冊の本としては枚挙にいとまがない。正史（ハード）もさることながらソフトの開拓を目指すことも必要になってきた。そこで人物史を編集しておくと、どんな効用があり、その編集時にはどんな苦労

があるかの一端を、例を挙げて話してみたい。

### 事典、書物編集時に人物史は効力を発揮する

この項は『日本キリスト教歴史大事典』を中心に話したい。この事典は1988年教文館が創立百周年を迎えて、その記念事業として出版された。刊行の目的は1549年のシャビエルの渡来以来、440年以上の歴史を経たキリスト教が現在のような形になるまで、どのような政治的、社会的圧力が加えられてきたか、その経緯を明らかにすることである。また、1858（安政5）年の開国とともに宣教師が相次いで来日する。この人達は日本の近代化に大きな影響を及ぼしたことはいうまでもない。

もう一つの大きな変革は第二次世界大戦後、学問、思想の自由が与えられ、キリスト教界も大きな変化を遂げ、世界教会運動が1962年のカトリック第2ヴァチカン公会議を起点として、全キリスト教会一致への動向が昂まりを見せ、共同訳聖書翻訳事業や言語の統一などが進められている。このような中でキリスト教の歴史と実情について一般には余り知られていない事柄が多いために「その欠陥を補い、正しい知識と情報を提供する網羅的なそして百科全書的事典が必要」（序文より）とのことで執筆者約1,300名に依頼し、編集して1,734頁の事典となった。

この事典は1976年にこの事業を開始して



第17回研究部会（中央大学駿河台記念館）

1988年の発行までおよそ12年間を要した。当然、当方にも問い合わせがあり、特に人物史に集中したことは事実である。そのとき、どのような資料が多く使われ、役立つかを考えさせられるよい機会となった。既刊のキリスト教事典またはキリスト教人名事典との相違は近世から現代に重点がおかれ、マイナーの人達も多く取り上げたことだ。その分役立つのだが、初めての試みであったため、間違いも多く、残部が無くなれば絶版である。

したがって、大学史編纂時に人物史資料を整理しておくと、このような企画に対応出来るだろう。また、同時期に『天上の友』第3編が基督教世界社で企画された。この第1編は1954年日本組合基督教会牧師会が満20年を記念したもので、内容は神学教師、牧師、宣教師で亡くなった人達の記念集であり、世の中に余り知られていないが、伝道に一身を捧げた人達の生涯が綴られている。これは写真資料もあって、この1冊がなければ、私達は年史編集時に苦労を強いられた筈だ。第1編には日本人33名、外国人47名を掲載する。

第2編は昭和8年の刊行で日本人36名、外国人47名を掲載、その後満州事変を経て、日本の軍国主義の時代に入り、キリスト教は目に見えぬ弾圧を受け、出版も途絶えた。やっと1988年8月に55年の空白を満たす企画がなされたが、人数が多く一人600字を出ないこと、外国人は名前と死亡年月日、年齢、派遣先の1行を原則に292名の日本人、100名の外国人を扱った。第3編には写真が入っていない。この時期に入れておかなければ、後世

になってからは入手困難で間違いも起こりやすい。

写真の間違いは年史でも見付かる。『梅花学園九十年小史』で宣教師の記事を1項目にして写真を付して掲載したが、ある宣教師の写真が無く卒業生に送って貰ったが、発行後他の卒業生の指摘により、他の宣教師の写真であることが判明した。他大学の年史でも写真の間違いを見付けたことがある。これは写真の裏書の誤記を信じて映像を把握できなかつたと聞く。編集時の多忙時に余裕を失って起きたものか、注意していてもミスはあるようだ。また、『日本キリスト教教育史：人物編』

（キリスト教学校教育同盟編 創文社1977）の時も、各学校に人物史の原稿を求められ、創立者51名、主要人物78名が掲載されたが、このときも急いで何人かを共同でまとめ、原稿を送った記憶がある。

#### 人物史は世の中の定説を変え得る

「この人はこの分野の草分けだ」とよくいうが、今まで大学史が余り刊行されなかった時代や年史が学校の組織や財政に重点をおいていた時代の人物史は創立者やトップ級の人達に絞られたために埋もれてしまっている人達も多い。そのため、人物史を掘り起こすことによって、一般の人達が抱いている定説が覆ることもある。

ここでは竹越竹代という女性新聞記者について話してみたい。旧姓を中村といって、岡山の出身で父が早く亡くなり、母静子は28歳で3人の子供を養育した。岡山はキリスト教の普及も早く、岡山教会初代牧師金森通倫を通して中村一家は信者となり、家計のために静子は山陽女学校からフェリス女学院、日本女子大学校で教師をした。竹代も山陽女学校から梅花女学校に入学し、1889年徳富蘆花と知り合った新潟県出身で、当時『大阪公論』の論説記者をしていた竹越与三郎と出会い、中退し結婚した。その結婚によって、女性新聞記者の道を歩み『国民新聞』のルポライターとして明治23年2月26日「別世界の音信＝帝国大学病院の模様」として「竹村女史」のペンネームで初めて記事が掲載される。その他著作も3冊ばかりあり、明治28年末まで執

筆を続けたが、蘇峰が自由民権思想から国家主義思想に移ったため、竹代夫妻は民友社を去る。羽仁もと子（松岡）の記事は明治32（1899）年8月6日から7回連載された「子爵夫人谷くま子」が最初であり、この事実により今までの定説となっていた羽仁もと子説よりも9年以上も女性記者の歴史がさかのぼったことになる。もと子が自伝『半生を語る』のなかで「はじめての女新聞記者」といい、『報知七十年』（1941）にも「この年（明治30年）、羽仁もと子が記者として入社したが、これが婦人新聞記者としての最初であった」と述べたことが定着したようだと江刺昭子氏は『女のくせに』で指摘している。

#### 人物史の資料—特に履歴書を中心に—

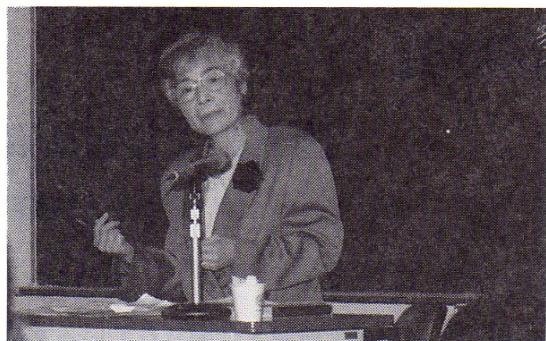
履歴書はその人の全生涯を表すものではないが、信用できる史料の一つであろう。生前に書いたものであるから、誰かが記録を継げない限り不完全なものである。死後では記念誌や追悼集もあるが、殆どの人はそうはいかない。前述の事典編集時にも個人が項目になる場合、キリスト教であるために告別式に使用した「経歴書」が残されていることがあり、これが正確で案外役立つことをお伝えしたい。これについては、『基督教世界』第3477号に「教会の告別式に参列して思うこと」を参考して頂けたらと思う。この経歴書には生まれた時から亡くなるまでのことが記されていて、故人が帰天に際し、私達に残していく生への記録である。これらの経歴を教会が保存することにより、年史や事典、図書編集時にも、貴重な史料として活用できるであろう。

#### 明治期の外国人の姓名や地名の読みの難しさ

明治期の史料の中には外国人の姓名のカナ表記や外国の地名を漢字で表記することもある、それが読み取れなく作業が難渋することがある。

##### 1. カナ表記（日本文学会＝米国シトクワ文学会大日本支部の例）

明治中期に大阪教会を中心に行われた教育事業が二つある。「日本文学会」と「泰西学館」（普通科男子中学校）の設立だ。前者は明治18年3月22日以降の朝日新聞紙上に会員募



講演する遠藤トモ氏

集広告をだした通信教育であり、事業の特徴はニューヨークの「シトクワ文学会」との連携協力関係であった。この「シトクワ」がシトクワ、セヨトウクワ、セヨトクワ、ショトクワ、ショクワとあり、雑誌ではセタウクワ、チャトウクワ、ショートクワー、シャトーカンなどとなる。表記法が確立されていない時代にはその都度書き方も異なり、戸惑うことがある。アメリカ側の史料が得られ、“Chautauqua Institution”と解明できた。同じ広告の中に外国人名がある。『朝日新聞』は「エー・エム・ツリナシ」、『福音新報』では「エー・エム・ドリンナン」と記されている。これはMrs. A. M. Drennanであり1883年に来阪、カンバーランド長老教会宣教師でウイルミナ女学校（現大阪女学院）の初代校長だ。スペルと経歴が判明するのにおよそ5年かかった。

##### 2. 地名の漢字表記

澤山保羅の同郷の友人でボストンで民法を学んだ名和道一の碑文を例とする。名和は名井、服部哲二郎（鉄次郎、哲次郎など）、繩綏、吉村又蔵、名和道一と5回姓名を変えた。文書から事項を抽出するときは、このことを承知しなければ見逃すことになる。戸籍や碑文がある人はよいが、ない人はなす術もない。彼が没した地「母斯頓」は読めるとしても、埋葬地「保列斯非児」=Horest Hillにいき当たるまで、辞書で見いだせないものは、ボストンの詳細な地図で攻めるほかなかった。

人物史は大学史編集の過程で生み出されたもの、あるいは最初から人物史として編集されたものがあると思う。人物史は思想史に連なる故に大学史の目的を一層明確にさせ、深める作用があると思う。

## 国立公文書館所蔵文部省公文書の追加公開

—「御真影」関係文書を中心に—

東京女子大学文理学部 米 田 俊 彦

国立公文書館で所蔵・公開されている文部省公文書は、各学校の設置・廃止や学則改正の認可に関する書類（学校からの認可申請書とその付属資料および文部省からの認可の指令の写し）がほとんどであった。これら個別学校との往復文書以外の、一般的な政策の立案、決定、実施に関わる資料はしばらくのあいだ文部省が保管していたのであるが、ようやくそれが1984年（昭和59）になって文部省から公文書館へ追加移管され（簿冊数462）、88年（同63）に公開されるにいたった。

内容はきわめて多岐にわたる。戦後の教育立法関係（学校教育法等）を含むが、ほとんどは戦前のものである。教育法規の制定過程に関するもの、宗教政策関係、行政や財政の事務に関するもの、直轄学校関係、社会教育関係、教員関係、学術文化政策関係など、文部省が所管していた領域のほとんどすべてにかかる文書が含まれている。ただしこれですべての文書が公開されたのかどうかはわからない（たとえば教育基本法関係の文書は含まれていない）。

今回公開された追加資料の中で、とくに大学史編さんにかかわりをもつと思われるのが「御真影」下付関係の文書である（簿冊の表題は『御写真奉戴及び複写』）。昭和天皇が即位して三年目の1928年（昭和3）から、同天皇の写真の学校への下付が開始された。多くの官公立大学・専門学校とごく一部の私立大学・専門学校がこのとき写真の下付を受けた。しかし天皇の写真は、保管上の問題を抱え込むことになるばかりでなく、とりわけ宗教系の学校にとっては「建学の精神」にかかる重大な問題を引き起こすことは明らかで、そのために下付申請をした学校は決して多くはなかった。

ところが思想弾圧から国体明徴・教学刷新

へとファシズムが新たな展開をみせ始めた1936～7年頃から、それまで下付申請をしていなかった私立大学・専門学校に対して、申請を求める「行政指導」が行われた。その結果この時期に天皇の写真を受け入れた私立学校はかなり多い。

写真の申請の具体的な手順はつきの通りである。学校から道府県を経由して申請書が文部省に提出される。この申請書には、天皇の写真を受け入れる趣旨だけでなく、写真の保管規則や保管施設（奉安殿あるいは奉安庫）の図面または写真が添付されている。管理体制が不十分とみなされた場合には再申請となったようである。文部省は申請のあった学校について一括して宮内省に下付申請をする。宮内省には添付書類は回らないので、ここでの審査はなかったと考えられる。

宮内庁書陵部には『御写真録』という表題の資料が所蔵されている。文部省からの申請書類とそれに対する決裁の記録である。どの学校にいつ下付されたかはこの資料によってこれまで明らかにすることは可能であったが、今回の文部省公文書の公開で各学校内部の対応の状況がある程度うかがえることになった。

また、「教育ニ関スル勅語」の謄本の下付についても、今回公開された資料の一つである『教育に関する勅語謄本』という簿冊に、各学校からの申請とそれに対する決裁に関する書類が綴じ込まれている。写真ほど厳重ではないが、やはり保管体制ができていることを示す書類が添付されている。

なお、本資料を用いて、戦時下の「御真影」下付を求める動きとそれに対する私立大学・専門学校の対応の問題が久保義三編著『天皇制と教育』（1991年、三一書房）で取り上げられている。

1992年1月22日(水) 研究部会

## 『武蔵野美術大学60年史』編纂に関する

### 部会報告を聞いて

中央大学大学史編纂課 北村 孝

第18回関東地区大学史連絡協議会は、1992年1月22日(水)、武蔵野美術大学キャンパス内12号館において開催された。武蔵野美術大学が1929年に帝国美術学校として誕生し、1989年創立60周年を迎える、その60年にわたる大学の歴史が、昨年7月『武蔵野美術大学60年史 1929—1990』として編纂・刊行された。当研究部会では大学のご協力により、同年史刊行に関わる諸問題について、編纂にあたられた4名の編集委員の方々から、詳細な報告をいただく機会を得た。なお当日の参加者は17校27名であった。

大学史連絡協議会は、大学史編纂および資料保存・利用等に関する共通の諸問題を協議し、情報交換を進める目的として、大学史編纂に関わる諸機関によって1988年6月に設立された。また、近年、各大学で大学史の編纂が活発に進められており、日本の近・現代史研究においても、新しい分野として大学史の研究が注目されている。当日の研究部会における報告者の方々による報告に、その認識をあらたにした次第である。

武蔵野美術大学は、東京都小平市小川町にあり、武蔵野の面影が漂う閑静な地にある。このキャンパスに造形学部…日本画・油絵・彫刻・視覚伝達デザイン・工芸工業デザイン・空間演出デザイン・建築・基礎デザイン・映像の各学科 大学院（修士課程）…造形研究科美術・造形研究科デザインの各専攻、それに武蔵野美術大学短期大学部…美術科、デザイン科グラフィックデザイン専攻、デザイン科工芸デザイン専攻、デザイン科空間演出デザイン専攻、生活デザイン科、専攻科があり、武蔵野市吉祥寺に短期大学部通信教育部がある。学生数は、約3,600名、この他通信教育課程に約2,600名学生が在学している。卒業生は36,000余名を数えている。



第18回研究部会（武蔵野美術大学12号館）

#### 報 告 概 要

報告は「武蔵野美術大学60年史」の編纂にいたる経過について、4名の報告者により下記の通り行われた。

「武蔵野美術大学60年史」編纂までの歩み … 小久保明浩氏（創立60年史編集委員会委員・教授）、「武蔵野美術大学60年史」編纂の基本方針 … 久保義三氏（創立60年史編集委員会委員長・教授）、「武蔵野美術大学60年史」の編集にあたって … 今井良朗氏（60年史編集担当・教授）、「武蔵野美術大学60年史」編纂の実務経過 … 渡辺博志氏（創立60年史編集委員会委員・事務局）

はじめに、創立60年史編集委員会の委員であった長澤和正常任理事の挨拶があり、渡辺博志氏の司会で各報告に入った。

小久保明浩氏は、創立30周年に際し、機関誌「武蔵野美術」において「創立30周年記念特集」が刊行されたが、その内容は座談会の記事が中心であった。また、創立50周年においては、「武蔵野美術大学50年の歩み」として、パンフ程度のものであったが、内容は通史ともなっているものが編集、発行された。その後も校史編纂が企画されたが、刊行はなされな

かった。1989年大学が創立60周年を迎えるにあたり、1986年「創立60年史編集委員会」が発足し校史編纂にむけて本格的な作業が開始された。そして、1991年7月「武蔵野美術大学60年史」が刊行されるにいたった経緯を報告された。

久保義三氏は、編纂の基本方針として、大学の歴史として客観性を保持すること、個性をうきぱりにすること、昭和期の芸術・文化・教育に与えた影響を分析すること、事実を過大評価したり隠したりせずに、事実を事実として客観視すること等を重視した点を指摘し、各々の論点を「60年史」に即して具体的に説明された。また、編集委員の中に本学出身者と他大学出身者とのバランスを考慮したことである。

今井良朗氏は、「60年史」はデザイン、装丁も学内スタッフのみでてがけている点を指摘された。その基本方針として、編集方針をいかに具体化するか、美術・デザイン教育の学校にふさわしいデザインとする、本文や年表といった内容の性格にあったデザインとする等にこころがけた点を強調された。

渡辺博志氏は、「60年史」刊行にいたる具体的な経過を、創立60年史編集委員会活動記録に基づき、編集委員会の活動を中心にして詳細に報告された。なお武蔵野美術大学では、編纂の資料を保存するため、昨年12月大学史史料室を設置している。報告後、活発な質疑応答があり、1時間にわたる報告を終了した。

### 美術資料図書館の見学

報告終了後、美術資料図書館を見学させていただいた。資料保存庫にて美術資料の整理保存状況等につき同館学芸員の方の説明をうけた。武蔵野美術大学の情報資料センターとして、美術資料図書館は、1966（昭和41）に発足し美術館と博物館および図書館の機能を総合的に果たすという構想のもとに設置された。収集されたすぐれた図書・美術資料は、利用者の要求に応えられるようにサービスを提供することが課題になっている。また、他の美術館・博物館等と資料の相互貸借や、サービスの相互利用などの交流活動も行い、展覧会の公開などによって、美術大学としての特色を生かし、まさに地域の中の大学として、



地域社会を中心とした社会交流活動も行っている。美術館活動においてサービスの中心は展示であるが、＜企画展示＞として毎年10回程度の展覧会が開催されている。また、＜常設展示＞もなされている。ほかに、彫刻陳列室がある。「'92 Musashino Art University」によれば、美術資料図書館収蔵作品として、美術・デザインの専門大学にふさわしいコレクションを築き上げることが使命であり、その核となる分野は「絵画・版画・彫刻」、「グラフィック・デザイン」、「プロダクト・デザイン」、「美術工芸品」、「民芸品」、「民俗資料」などとなっているが、近年ではジャンルを横断するかたちで研究テーマ別の収集も企画されている。収集品のうち、とくに「ポスター」と「近代椅子」はデザイン史を研究するうえでの重要な基礎資料のひとつとして開館以来20余年にわたり継続的に集められている。

多くの貴重な収蔵作品を見せていただき、収蔵庫等のあり方につき、多くの示唆を得た。

### 『武蔵野美術大学60年史1929—1990』について

体裁はB4変型判、縦組、本文は455頁、箱入、内容は、第1部 武蔵野美術大学の歴史的発展 第2部 武蔵野美術大学の教育展開とその成果、の構成となっており巻末に武蔵野美術大学年表1929—1990、学科・専攻の変遷並びに武蔵野美術大学の現況が付されている。装丁をはじめ、あらゆる面に美術大学の年史にふさわしい配慮がなされている。

60年史の概略は次の通りである。（本巻目次より抜粋）

第1部 武蔵野美術大学の歴史的発展  
1929—1944帝国美術学校の創立—  
美術教育の理想を求めて

1945—1956戦後美術教育の再建—  
帝国美術学校から武蔵野美術学校へ  
1957—1968大学制度への移行—  
造形教育の総合に向けて  
1969—1990学園紛争から1990年代—  
美術・デザイン教育の新たな展望

第2部 武蔵野美術大学の教育展開とその成果

戦前・戦後美術の動向と美術教育  
現代美術の動向と美術教育  
戦前デザインの動向とデザイン教育  
戦後デザインの動向とデザイン教育  
現代デザインの動向とデザイン教育

建築・工学と芸術の結合  
デザイン学の形成  
美術・デザイン教育の理論科目  
武蔵野美術・通信教育の40年—  
その成果と課題

武蔵野美術大学の教育環境  
以上が、『武蔵野美術大学60年史』の概要である。

おわりに、大学関係者の方々の絶大なご協力により、充実した研究部会を終了することができた。あらためて、感謝の意を表する次第である。

### 関東地区大学史連絡協議会 常任委員会議事録（抄）

第23回 (1991年9月27日(金)14時—15時)  
場所 国立公文書館  
出席校 神奈川大学 成蹊大学 専修大学  
中央大学 明治大学  
議事 (1)1991年度事業計画について(継続)  
(2)その他(石原一則<神奈川県立文化資料館>の協議会入会を1991年9月20日付で承認する。)

第24回 (1991年11月28日(木)14時—15時)  
場所 中央大学駿河台記念館 510号室  
出席校 神奈川大学 成蹊大学 専修大学  
玉川大学 中央大学 東海大学  
日本大学 日本工業大学 明治大学  
議事 (1)1991年度事業計画について(継続)  
(2)その他(細井守氏<藤沢市文書館>の協議会入会を1991年11月28日付で承認する)  
\*会報『大学アーカイブズ』第6号発行の件に付き、立教大学の協力をえて、同大学と神奈川大学が編集を担当することとする。

第25回 (1992年1月22日(木)14時—15時)  
場所 武蔵野美術大学 12号館8階805会議室  
出席校 神奈川大学 成蹊大学 専修大学  
玉川大学 中央大学 日本大学  
日本工業大学 明治大学 立教大学  
議事 (1)会報第6号の編集について

(2)来年度の事業計画について  
(3)その他  
\*全国歴史資料保存利用機関連絡協議会から『記録と史料』原稿の執筆依頼があり、有志担当として了承される。

### 研究部会記録（抄）

第16回 (1991年9月27日(金)15時—17時)  
場所 (1)国立公文書館 4階 会議室  
(2)国立公文書館 1階 展示室  
参加校 16大学3個人会員 計31名  
概要 公文書課西山正純氏より国立公文書館の概要の説明があり、同館紹介のビデオ観賞後、特に文部省公文書関係を中心にその内容の説明を受けた。最後に展示室で同公文書原本の閲覧をした。  
\*昭和59年移管分の文部省公文書につきましては本号に掲載した米田氏の論稿をご参照下さい。

第17回 (1991年11月28日(木)15時—17時)  
場所 中央大学 駿河台記念館 510号室  
参加校 21大学2個人会員 計30名  
講演会 講師 遠藤トモ氏  
(梅花学園学園資料室課長)  
演題 「大学史編纂と人物史」  
\*講演内容につきましては、本号に掲載した遠藤氏の論稿をご参照下さい。

第18回 (1992年1月22日(木)15時—17時)

場 所 (1)武蔵野美術大学 12号館 8階805  
会議室  
(2)同大学 美術資料図書館

参加校 17大学 1個人会員 計27名

概 要 『武蔵野美術大学60年史』編纂に関する諸報告があり、その後質疑応答が行われた。報告終了後、美術資料図書館を見学し、資料保存庫にて美術資料の整理・保存状態等について同館学芸員の説明をうけた。  
\*報告内容につきましては、本号に掲載した北村氏の論稿をご参照下さい。

## 三二情報

### \*大学史出版物

- 『中央大学百年史編集ニュース』第17号  
1991年12月刊行  
1991年12月上旬に開催された「花井卓藏展—ある法曹家の足跡と理想—」の記録と収集資料の紹介。
- 『中央大学史資料集』第10集  
1992年3月刊行予定  
国立公文書館に所蔵されている文部省公文書（昭和59年度移管分）から中央大学の関係資料を採録。
- 『中央大学史資料集』第11集  
1992年3月刊行予定  
東京法学院から中央大学に至る間、院長・学長を勤めた菊池武夫の日記（明治31年～同39年）を翻刻。
- 『中央大学史紀要』第4号  
1992年3月刊行予定  
論考「私学政策史の一研究」（菅野芳彦）他を収録。

### 編集後記

早いもので『大学アーカイブズ』も6号まで数えるようになりました。紙面構成などの編集作業は毎号試行錯誤の連続ですが、掲載させていただいた原稿はそれぞれに興味深く、意義あるものと確信しています。もっともっと交流を深めるためにも、たくさんの情報をお寄せ下さい。お待ちしています。（N）

#### <会報編集担当>

神奈川大学資料編纂室 〒221 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 ☎045-481-5661  
立教大学大学史資料室 〒171 豊島区西池袋3-34-1 ☎03-3985-2693

『神奈川大学史資料集』第8集  
1992年3月刊行予定  
国立公文書館所蔵文部省公文書から横浜専門学校の学則変更届関係資料（昭和13年～同16年）を収録。

## ご案内

### \*第20回研究部会のお知らせ

来たる4月15日(水)に、早稲田大学において、「大隈重信と早稲田大学」展の見学、同大学大学史編集所事務長関田かおる氏の報告「早稲田大学大学史編集所の歩み(仮題)」を中心に行なわれます。

### \*関西地区での研究部会の開催について

今年9月30日～10月2日にかけて京都、大阪で本協議会の研究部会を開催いたします。この研究部会では、国立民族学博物館や関西地区の大学史資料室等の見学、そして講演会、パネル・ディスカッションなどを予定しています。同時に、1990年9月に発足した「西日本大学史担当者会」の方々との情報交換、交流を深める機会ともなります。「西日本大学史担当者会」は、すでに昨年5月に「会報」を発行し、加入機関も19校(1991.5.31現在)に及び、着実な活動を進めています。

### \*事務局からのお知らせ

本協議会に関するお問い合わせ、入会申し込みは、下記事務局へご連絡ください。会則、会報No.1～No.5などをお送りいたします。

なお、1992年度総会は5月に中央大学駿河台記念館で開催する予定です。

#### <事務局>

中央大学広報部大学史編纂課  
〒192-03 東京都八王子市東中野742  
☎0426-74-2132